義理と褌

府川 昭男

（一）

風の強い日だった。

ボタンを外したコートの前が大袈裟に風にいた。京王線の下高井戸駅である。

何年ぶりであろうか。杉田良一は一度ホームに立ち止り、建物や道路がどう変わったか、眺めまわした。

桜の花は散り、埃が舞っていたが、昔のままの通りが残っていて踏切があり、あの八百屋へ行く通りは、すぐ分かった。

そう、六十年ぶりなのだ。で、通りは同じでも、建物や店はすっかり変ってしまっている。

駅から五分足らずの目指す八百屋は、今は空地のような状態であった。二十年ほど前に小金井の方に転居したという話は聞いていた。

隣りは下駄屋だったが、今は花屋に変わっていた。墓参り用の花束を買いがてら聞いてみた。

「となりは八百屋さんだったと思いますが……」

「そのようですが、私どもは十年ばかり前に店を始めたもので、くわしいことは存じません」

中年の小綺麗な女性が答えた。

「永昌寺というお寺さんに行きたいのですが、ご存じでしょうか」

杉田は、かさねて尋ねた。

「ハイ、そのお寺さんは、すぐそこの二四六号線を渡って、三分ぐらい歩くと右側に看板があります。近いですよ」

その女性は杉田が買った花束に白い紙を被せながら、教えた。

国道二四六号線には歩道橋が跨（またが）っていた。強い風で橋が揺れ、すこし不気味だ。その橋を踏みしめながら杉田は渡った。

下り坂を十分ほど歩いたが、それらしき寺はない。小川があって五十搦みの男二人がベンチに腰をおろしていた。
「あのー、永昌寺はどの辺りか分かりますか」
「え、えいしょうじ？　知らねえなあ、おめえ知ってるか」
首にタオルを巻いた男に声をかけた。
「いや、わかんねえ……あ！　思い出した。あの旅の人、大分通り過ぎたよ。この坂を戻って、坂が終ったところの左側にあるよ」
「ありがとうございました」
杉田良一は、お礼を言いながら、地理も方向も音痴だなあと自ら苦笑する。そして「畜生め」と自分を責めて、いささかきつい坂道を引き返した。今は左側の歩道であるから、左を注意して見ながら歩く。すると左折の道路があり、二軒目が寺であることが、こっちから分かった。
天長山・永昌寺の門の横に禅曹洞宗と書いてあった。大通りの喧噪と違って、ここは静かである。山門を潜って歩くと右手に庫裏らしい和紙を貼った障子の入口があった。
木鐸を叩くと、部屋の遠くの方から「はーい」と老人の声がした。
障子が開いて、僧と思しい背の低い男が顔を出した。
「何か、ご用事ですか」
「あの、住職様ですか？　すこし伺いたいことがあります」
気がよくて優しそうな住職は「何なりと、聞いてください」と、からだ相応のすこし頼り無い声を出した。
「丸田宋太郎さんのお墓を教えて欲しいのですが……」
「ああ、ちょっと待って下さい」
一旦、おくへさがって墓地の配置図を持ってきた。
「この通路の行き止まりを左に折れて三番目になります」
「はい分かりました。これは、ほんの気持です。どうかお納めください」
杉田は、お布施を五万円渡した。
「ご親戚か何か、お名前を伺いませんと……」
「昔、世話になった者で、名乗るほどのものではありません」
「お線香を……」
「今日は風が強いようですから、遠慮しておきます」

杉田は、瞬時〝風と火〟を思い描いた。たいした理由はないが、子供の頃二軒隣の遊び友達の家が丸焼けになったことが脳裏をかすめたのかもしれない。

墓所は、寺の裏にあり、通路から二段さがっているのが不思議だった。住職に教えてもらったとおり墓石の通りを歩いて行くと、しばらく手前から〝丸田家〟の石塔が見えた。風だけが強く吹き、人は誰もいなかった。

杉田は、当り前のように左右の花器に持ってきた花束を差し込んだ。そして、石塔に水をかけた。それからコートを脱いで合掌した。

――長くかかりました。心の整理もなかなかつきませんし、お世話になりながらお礼ができませんでした。今やっと、ご長男の辰夫様に、私のできる範囲でお詫びのしるしを送ります。十ヶ月間ありがとうございました――。

杉田は声を出して、礼と詫びを言った。が、風に吹き消された。杉田は計算していた。ここの住職が「名前も言わず、老齢の男が墓参りにきた」ということを丸田の家の者に伝えるだろう、と。

六十年前、ただで寄宿させてもらっていたことに対する礼としては、できるだけインパクトを強くしておかなくてはならない。

墓参りから帰ろうとすると左手に鐘楼があった。そのそばに鉄櫓があり、一番上には小さい鐘がぶらさがり、四メートル位のところに監視カメラらしいものが見えた。杉田はあえて、進んで一番そばまで近づいてみた。何もおこらないので大変失望した。面白くなかった。

二時だった。ついでだからと思い母校に寄ってみた。当時三階建の校舎が野原に一棟ポツンとあった場所は、今は所狭しとばかり高層の建物が林立していた。受付まで行って話をしてみた。当時のビルも残っているというけれど、このビル群を見ただけで杉田は吐き気をもよおした。当時は芝生の野原が広々としていたものだ。芝生に寝そべって、友人と語り合ったり読書をした。いっとき杉田は昔を懐かしみ、今は暗い心持で下を向いて帰路についた。

春嵐は止みそうになかった。

※

杉田は秦野の家に帰った翌日、小金井の丸田辰夫宛に手紙を書いた。詫状ではあるが、住居の確認が主な目的だった。

はたして十日たっても返事はなかった。手紙が返送されないことは、相手が間違いなく受け取ったと推定できる。

二十七年前、杉田の後継ぎの長男が身罷(みまか)って、葬儀を行なった。長男は、まだ六十二歳だっ

た。その時、わざわざ東京から埼玉の片田舎まで丸田の長男――辰夫が出席してくれた。酒の勢いがあったのか杉田良一が、「辰夫さん、宋太郎叔父さんの墓があるお寺の名前と今の辰夫さんの住所を教えてください」と頼むと、彼は誰かの名刺の裏に、寺名と自分の住所を書いてくれた。杉田は、その名刺を大事にもっていたのである。

翌四月の初旬、杉田は信用金庫で百万円の小切手を発行してもらった。それを郵便局の現金封筒に入れ、丸田辰夫宛に送った。

これには、つぎのような詫手紙を同封した。

――今更、何をと言われそうです。誠意の一端を示そうと思うものですが、自己満足ととられるのも致し方ありません。

振り返ってみますと、あの戦後の物不足の時、徒(ただ)で居候を決め込んで恥じない男がおりました。その後今まで何の手も打たず放置したことは誠に遺憾です。

何はともあれ永昌寺に参り、貴父上の宋太郎様にお会いしてきました。手を合わせますと、あの優しいお顔が思い出されました。決して文句も言わず、時に「おい、風呂に行こうや」と誘ってもらったことなど、今でも忘れません。「どうした、こら!」と怒られるかと思いましたが、強い風で聞こえませんでした。正直、何でそんなに意固地になってしまったのか、自分でもよく分かりません。

下高井戸駅付近は、すっかり様変わりしていて昔の面影はない感じでした。半世紀以上も経っていますから当たり前かもしれません。駅舎は大きく変わりましたが、道路は昔の位置がそのままで懐かしく思いました。

それはさておき、心の重しを軽くするため、勝手ながら一部を送金させて頂きます。

どうかご査収のうえ、この悪い男を許してやってください。

学生時代を顧みますと、生来怠け者のせいで出世もしなければ金持ちにもなれませんでした。ただ少し長生きをしているのは、胆のう切除、膀胱全部摘除、痔核切除など悪い臓器を取り除いたせいかもしれません。

人工膀胱ですから日常生活はやや不便です。よって四級の障害者です。

今は昔のことを、とやかく言っても無意味ですが、馬鹿な意地を張ったことは深く反省しお詫びする次第です。

どうかこの小切手を受けとって下さるようお願い致します。

ご家族の健康とご姉妹の健勝を願って擱筆致します――。

丸田辰夫からの返事はなかった。

翌五月中旬、杉田は再び小切手を今度は五十万円送ることにした。そうして手紙を同封した。

――今も元気に活躍していることと忖度致しています。

人生とは何か、自己の有り様はどうあるべきかなど、つまらないことを考えています。平凡でいいのですが、中中うまくゆきません。

さて、今回ここに送金しますが、金額は半分です。そして最後になるかもしれません。人との付き合いは銭金だけの問題だけではないとは思っています。しかし、長いことお世話になり、宿泊させてもらいながら今日に至ってしまいましたことは自ら痛恨の極みです。

ただご恩がえしの一端として、認めて頂き、どうか穏かな心で、この男を助けて下さるようお願い申し上げます――

杉田は、こう結んだが「最後になるかもしれない」という文言が誤解されるかもしれないと思った。こちらは送金が最後になるというつもりであるが、一般的に「最後になる」と言うと、人生の最後、死ぬ前の言葉として受けとられるような気がした。が、敢えて使うのも面白いではないかと思い直して、そのままにした。

杉田は、送金額については少し悩んだ。多いに越したことはないが、人生を失敗した男だから、多すぎるのも良くないと思った。それに少しばかり、けちな心が動いたのも否定できない。この年になっても、この男は何も割り切れない。優柔不断なのだ。

人間は年齢とともに、いや年齢に関係なく死ぬまで、少しづつ成長するよう期待して、いいのだろうか。成長の可能性を信じなければ、生きてゆけないと杉田は思う。

メタボリズム（新陳代謝）という言葉がある。それは生物学的には、たえず行なわれているのであろうが、意識下の記憶として忘却の速度は速いようだ。

（二）

昭和二十一年春、杉田良一は、知らない女学生から手紙をもらった。同い年の十七歳、同じ汽車通学であったので、杉田を見ていたようだ。まだ男女共学以前であったが、戦争は終った、もう民主主義だ自由主義だという気風はあった。

いかれたやつ、おとなしい面もある、一匹狼的なところがある。こんな所をねらって手紙をしたためたのではないか。杉田自身も、ずっと交際相手を夢想していたから、渡りに舟のように思い「付き合って欲しい」という手紙にたいして直ちに返事の手紙を書いた。

兄の持っていた人生論の本を読み、その一部を借用して、自分はこんなことを考えている。男と女はどうして、こんなに求めあうのだろうかなどと、数かぎりなく手紙を書いた。

その相手は福田ふみよと言う名前で、杉田の手紙に対して必ず返事をくれた。杉田は狂おしいばかりに福田ふみよのことばかり思うようになっていった。ラブレターを書くことが愛することだと思っていた。他に何ができよう。会う手もあるが、何となく胸が苦しくまだそんなことは出来そうにない。

朝の八高線の列車内で、ふみよの同級生らしい女学生が隣の車両から杉田を見つけ、指さしたりしながら興味津津という感じで大騒ぎしているのを杉田は何度も見た。はじめは興奮したが、しまいには少し得意だった。

そもそも、ふみよの手紙を杉田に届けたのは、杉田と同級生の黒田幸子という小学校の教頭の娘である。ややはにかむように「これを届けにきました」と言って、白い封書を杉田に渡したのだった。

後で同窓会の折に聞いたところによると、「私、両親に相談したんですよ。父は、あの男なら間違いをおこすことはないだろう。届けてやりなさい、というのであなたに渡したわけよ。これでも悩んだのですからね」

と言われ、杉田は当時浮かれていて全く黒田の心中など考える余地などなかったことを黒田に詫びたものだ。

※

戦前は、生活の大部分を先生や両親、上の者の言うことを聞いていれば、よかった。もっぱら国のために尽すという心構えでなくてはならない。言うなれば自分で考えるまえに指導者の言いなりになっていればよかった。この意味では気楽なものだったのである。今は違う。自分の進路は自分で決めなくてはならない。これは案外厄介なことである。

杉田は弁護士を夢見た。そして女に認められるようになりたい。平和で一家団欒、子供と遊べればよいと思った。

それには大学の法科を目指すのが当面の課題になる。

「日南大学の予科に入れば、あの一高の白線二本のついた帽子が被れるぜ」

級友の早川がけしかけてくる。

「それで女にもてる。一高生と違うと分かっても、とにかく大学生だ。こんな田舎のほうには大学生は、あまりいない。女にもてる。あとは腕と頭の問題で弁護士だ。うん俺か、俺は教授になる、多分文学部だ」

早川は、いつも試験の点数が良い。自分の目標をしっかりもっている。たいしたやつだ。そこへゆくと杉田は、英語と数学がいつも五十点を前後している。情け無いことだ。

それでも杉田は敢然として青明学院大と日南大の予科の試験を受けた。

※

埼玉県の北の外れから東京に行って受験するわけだから、宿泊場所を考えなければならない。幸いにも母の妹の嫁ぎ先の男が東京で八百屋をやっているという。その男の実家はこの村の西の方にあるらしい。

杉田は、母から聞いた地図を見ながら単身その実家を探した。名前は丸田忠弥という。聞いたような名と思って考えたら、宝蔵院流槍の達人丸橋忠弥だった。

表札などない時だから、直接聞くしか方法はない。時刻は二時をまわっていた。

「あの、こちらは丸田忠弥さんでしょうか」

開けっ放しの入り口から声をかけた。

姉さん被りの中年女性が暗がりから顔を出した。

「はい、丸田だけんど?」

杉田は、東京の八百屋に二、三日厄介になりたいので、こちらから連絡をとってもらえないかと頼んだ。「うちの人に聞いてみるから……」と言って、近くの畠にいた五十搦みの男を連れてきた。男は麦藁帽子を取って、

「丸田で、あのー杉田さんですか、長いことご無沙汰しています」

杉田の祖父は昔村長だったので、この村では知らない者はいない。丁重な挨拶で杉田は、少し戸惑う。さきほどのことを繰り返し、実は二人お願いしたいのです。と付け加えた。

「八百屋だけんども、なんせ狭い家だから、雑魚寝(ざこね)を覚悟してもらうことになるべえ」

「いや、もう、その辺は何でもかまいません寝るだけですから」

「それでよければ宋太郎によく言っておくべ。なに宋太郎は気のいいやつだから、俺がよく話しておくよ」

丸田忠弥は軽く引き受けた。杉田良一は、その八百屋の場所を知らない。略図を書いてもらうと、何と杉田の一番狙っていた日南大のすぐ側だった。

杉田は翌日、三原に「止まる所がきまったぞ」と告げた。三原は杉田が日南大受験の話をすると「俺も受験したいが、寝る所がないんだ」と言って、杉田に相談を持ちかけていた。

三原と杉田は同級で、特に柔道が好きな所が二人とも共通していた。

「何を持っていったらいいかな」

と三原に聞かれたので、
「米の一升も持っていったらいいだんべ」
と杉田は答えた。何分にも戦後の食糧事情は異常としか言えない、食べるもののない時代だった。
杉田と三原は試験の前日、寄居駅で待ちあわせ、東上線、山手線、京王線に乗り、下高井戸駅で降り丸田の店に行った。
狭い道路の両側にいろいろな店がならんでいる。この近辺は、あの戦争のとき、空襲を受けなかったらしい。
五分も歩かないうちに丸田の店についた。十一時前だったが、もう客が二、三人いた。背中に大きなリュックを担いだ学生二人が店の前に立った。
同年輩ぐらいで色白の背の高い男が、二人を素早く見つけ、
「杉田さんですね、その横丁の路地を通って裏へ回ってくれる?」
と言うので、二人は裏口へ向かった。木戸を開け、店の裏側へ出ると、少し離れて物置らしい小屋があり、中庭風の空地に出た。
右手のドアが空き、髪の毛の薄い頭をした好好爺が商人らしい前掛けをして顔を出した。
こんにちは、という前に、
「やあ、いらっしゃい。話は聞いてるよ。ここから上って荷物を開けるといい。狭いけど一晩か二晩だから、お互いに我慢することだな」
「はい、よろしくお願いします」
二人は同時に頭をさげた。
家の中に入ると、板の間があり、右側にガス焜炉が二口付いていた。そこは三畳ほどで、続いて八畳間が二つあって敷居はあるが間敷切はなかった。その先に障子があり、障子を開けると、四坪ほどの店になっていた。
「まあ、この辺に寝てもらうか」
丸田宋太郎は、そう言って寝場所を指定した。杉田と三原は、それぞれリュックから毛布を出し、米袋を取り出した。
「すみません、米だけ持ってきました」
と、杉田が二升の米を宋太郎に渡した。
「そろそろ昼だな」
宋太郎が言ったので、杉田は、

「あの、明日の試験の下見に学校へ行ってきます。昼食は途中で間に合わせます」
と、答えた。
日南大へ行く途中で、コッペパンを一個ずつ買って、学校の蛇口の水を飲みながらパンを一気に平らげた。
「やっぱり、この辺は新宿あたりと違って静かだなあ、田舎みたいだ」
三原が言う。
「うん、敷地は広いが校舎がポツンという感じだ」
杉田が答えながら、四階建のビルを見る。
中を覗くと、金ボタンの学生が沢山いた。白線帽の者も勿論歩いていた。休憩時間のようだった。
「ここで教授の講義を聞くのか、胸が躍るなあ」
おとなしい三原が、合格したように言う。
「うん、明日の試験頑張ればの話だ」
杉田は、白線帽に憧れたこともあるが、競争率の低さも計算にいれていた。他の大学は三人に一人以上だったが、ここは二人に一人の合格率だということを知っていた。それぐらいなら英語や数学の試験のないということでもあり、試験に合格するような気がしていた。
一時間ほど校内外を見て回った後、寄留予定の八百屋に戻った。店にはあまり客はいなかった。いろいろな野菜やリンゴなどの果物が台の上に乗せられていた。
「ただいま」
と、いう可愛い声を発しながら女の子がランドセルを背負って帰ってきた。
宋太郎が、
「おかえり」
と声をかけた。知らない学生の二人をチラッと見たが、両者とも何も言わない。
「末っ子で、普通チビチャンと呼んでるんだ」
と、宋太郎が言った。
「こんにちは、今日はよろしくお願いします」
杉田が声をかけたが、無表情だった。
ちびちゃんは、すぐ遊びに出ていった。
一時(いっとき)ほどたって、また、
「ただいまー」

と言って、前の子より大きい女の子が帰ってきた。
「おかえりー」と宋太郎が迎えた。
宋太郎の話によると、下の娘は小学校二年生で、上の娘は同じく五年生だという。
名前は、末娘が竹子、長女は京子という話だった。竹子は気性がはげしいようで、京子には優しさが読めた。母親は、肺だか心臓だかを悪くして五年前に他界したと、後で宋太郎から聞いた。以後、食事は宋太郎が、ひとりで煮炊きして、子供達三人を育ててきたようだ。
その日の夕食は、御飯に納豆、豆腐入りの味噌汁だった。杉田は、子供の頃、この納豆を食べた記憶がある。まずい物の代表だった。しかし今、見よう見まねで何度も掻き回して食べてみると、意外にうまいのにびっくりだった。嗜好は変わるのだ。
翌朝の食べ物は、米の飯に生卵、若布（わかめ）の味噌汁だった。昨夜と同じように沢庵の漬物がまるい卓袱台（ちゃぶだい）の中央に置かれていた。米以外は皆店頭に置かれているものだ。みんな美味だった。子供達は「行って参ります」と言って先に小学校に行った。
二人の学生に、宋太郎は言った。
「とにかく大変だな、まあ頑張れや。気楽にやるのも必勝法だと聞いたことがある」
「ありがとうございます。出来るだけ集中してみます」
杉田は答える。三原は、
「いろいろお世話になります。一生懸命やってきます」
と言い、二人は徒歩で目指す学校へ出かけた。
大学校では、皆緊張していて、さすがに笑顔は少ない。入学試験だから、当たり前であろう。
杉田と三原は受験番号が大分違っていた。広い講堂のはるか右後のあたりに三原は陣取っていた。
試験は、筆記が論文形式のもの、あとは心理テスト、頭の骨格を計ったが、これは試験ではないかも知れない。勿論、中学校の内申書も送られている筈だ。戦後間もない頃で、試験用紙は藁半紙、ガリ版刷りであった。
こうして入試は済んだ。
杉田は三原に聞いてみた。
「どうだった？　うまく答えられたかな」
「うーん、はっきり言って自信はない」
三原はそう返事をした。そして「俺は今日、これから仕度して帰る」と言った。
「そうか、俺は明日、青明学院大の試験を受けて帰るつもりだ」

杉田は、そう三原に告げた。三原は、
「後は吉報を待つだけだ」
と、屈託なげに言うのだった。
三原は宋太郎に深々と頭を下げ「お世話になりました」と言って帰っていった。
「グッド・ラック」
三原は杉田に向かって珍らしいことばを残して、ニコリとした。
杉田は、翌日青明学院大の入学試験を受けたが、まったく自信はなかった。
その事を宋太郎に言うと、
「まあ、学校だって向き不向きもあると思うよ、気楽に待つのも人生修行だ」
あまり意味のわからないことを宋太郎は言う。慰めてくれているようだ。
その日の夕飯の後にリンゴが出た。四分の一ずつに切ってある。そして「これが紅玉、こっちは国光だよ」と説明してくれた。
杉田は久しく食べてない果物が珍らしかった。それに旨かった。ただ紅玉の方が酸味が強かった。これも店にあるものだった。
杉田は、二泊宋太郎の家で過ごして帰郷した。

※

藁葺きの家が闇の中に大きなシルエットとなって見え、暖かく迎えてくれる。
杉田良一が実家に着いたのは、夜七時を過ぎていた。上がり框の横に囲炉裏(いろり)があり、家族六人がいた。両親、兄と妹二人と弟一人だ。自在鉤の下には大きな鉄瓶が掛かっている。
「どうだった？　宋太郎さんは元気だったかい」
と、母は食事の仕度をしながら、先ず宋太郎のことを聞いた。
「ああ元気で、親切にしてくれた」
良一が答えると、父が、
「試験の方は、うまくいったか」
と言う。
「うん、まあ、ひとつは大丈夫だと思う」
と良一は、食事しながら答えた。
食事といっても、いつもの通り煮餺飥(にぼうとう)である。鍋に煮干しを五、六本入れ、かぼちゃや旬の野菜をきざみ、水を入れた鍋に入れる。一方で粉を練って、伸ばし四、五ミリ巾の生うどんを鍋に放り込む。母の手作りだ。良一は三杯を慌てるように啜る。

大戦後は、農村でも食糧事情は大変していた。

杉田良一は、麦踏みや牛を使った田を手伝ったりして、ひたすら通知を待った。もちろん合格通知である。

青明学院大からは、予想通り不合格の連絡がきた。日南大からはなかなか通知が来なかった。合格通知がきたのは、本来の通知日より、ほぼ二週間遅れていた。後で分かったことであるが、配達人の手違いがあったらしい。文句を言いたい所だが、とにかく入学できるということで、入学手続や送金など慌しくやることになった。

三原に連絡をとると、合格はしたが、寝る所がないから入学しないという。そのかわり、茨城大に行くと言った。親類があるのだそうである。杉田は「おめでとう、でも一緒に勉強できないのは残念だな」と伝えた。

※

春四月、今年は桜の咲くのも遅い。

旧制中学五年生の時に、手紙で誘惑されて、手紙だけの交際をしていた福田ふみよに杉田は、日南大に合格したから東京へ行くと言った。杉田良一が、生れて初めてのプラトニックな恋なのだ。どうも、ふみよからの返事には重みがなかった。よろこんでくれるのが他人事のように感じられた。

良一は、また丸田宋太郎の八百屋に暫、厄介になることにした。ここも最初のうちは、喜んでくれた。

一方、大学の講義は新鮮で期待できるものが多かった。しかし、中味はなかなか難かしかった。たとえば独逸語などは、教授自身が、

「覚えにくい言葉だから、全講義に出席すれば単位はあげます」

などと、あらかじめ言うこともあった。よって、よく耳にする代返が間間あるのを杉田は知った。要領のいいやつは、どこにもいるのだ。

一週間後、教室に残っている学生が四、五人いた。何やら一人を中心に話が聞える。

――諸君、わかるかな。ものには凡て法則がある。自然の法則はだ、いいかね、山川草木と言えば、うたた荒涼、と詩吟では続くが、これは戦後諸君たちが、強く胸を痛めたことだろう。いや同情を禁じ得ない所だ。法則の話だ、本旨にもどろう。さて、山川草木、海などは自然の法則にもとづいて成り立っていることは、ご存知の通りだ。

そうだ、諸君は選ばれて、ここにいる。そして、喜びと不安を胸に将来の展望が開けるものと夢みている。甘い。なぜか。常に法則があることを忘れているからだ。いいかね、諸君、今社会がどう動いているか、考えたことがあるか。ねえーだろうなあ。ん？　食料不足だが、後五年も経過しないうちに解決する。戦争がなくなれば、みんなが働く。そうすればだ、あらゆる生活用品なんか、すぐ作られる。これが生産の法則だ。分かるかな。そこでだ、諸君は文系の学生だから、所謂理数系、理工科系の者と比較すれば、数字には多少は弱いか、気がのらない筈だ。しかし、これからは、考え方や物がデジタル化するに違いない。なに、デジタルが分からない？　さもあろう、これはだ、ある量またはデータを数字列としてあらわすこと、つまり、例えば時計の針が無くなるってことよ。そんな馬鹿なだって、しょうがないなあ、時計は数字で何時何分、何秒というように表されるのだ。これからはコンピューターの時代になる。デジタルの反対がアナログということになるな、諸君は、このアナログ派ということだ。なに心配はいらない。頭のいいやつがいて、諸君で十分わかるような物や機械を作ってくれる。俺が考えた進歩の法則なのだ、これが。話が長くなった。つづきは次の機会にするが、最後に俺の考えた人生の法則を諸君に伝授しよう。あと二十年、いや三十年後になるかな、諸君も自分の自動車が持てるようになる。夢だと思うだろう、まあいい。ただ他人の車でもタクシーでもいい。いち度乗っておくことだ。自動車にはH形という変則ギヤが付いている。普通左下に丸い頭をつけた握り部分がある。初速の時は、ギヤをH形の左上に押しこみ、クラッチを静かに戻す。二速はHの横棒を通り越して、左下へ引き戻す。H形の（文字の）横棒部分にギヤを入れるとニュートラルになる。原動機と切り離されて、自動車は動かなくなる。ここが大事な所だ。三速はH形の横棒、つまりニュートラルからH形の右上部にギヤを押し込む。分かるかな、分かんねえーだろうなあ。ニュートラルとは中立という意味もあるが、俺の言いたいのは、このフリーの状態、即ち肩の力を抜いた形、考え方や行動に即応できる姿――ということだ。これをして言えば、かの宮本武蔵の（晩年）剣の境地だ。哲学的な無の境地、宗教上の「無」もあるな。言っておくが、新興宗教には決して、のめり込むなよ。これは俺の人生法則には無いものだ。宗教そのものは否定しない。

さて、今日は、このくらいにしておこう。またの機会に俺の考えた「法則」というものを披露しよう。我が蘊蓄の程を見せようぞ、諸君。うん？　俺の生産地か？　北海道でござる。榎本武揚の末裔とでも言っておくことにしよう。自慢じゃあないが進取の気象に富むこと、他に引けをとることなし。では解散、後日再開。

この面白い男、少し変わっていると言ってもいいかも知れない。教授でもあるかのように、一方的に持論らしきものを述べるのであった。

杉田は、この風変わり男の話を最後まで聞いた。すべてを「法則」できめつけるところには、何か解(げ)せないところがあるが、説得力がある話もあって、世の中は広いものだと思った。やはり東京には、いろいろな人間が集まるものだと感心したのだった。

※

寄宿先の八百屋は、いつものように賑わっていた。映画監督の夫人だなどという、四十歳代の美人もやってくる。下町風な着物姿の六十歳ぐらいの年輩の婦人も買いにくる。

ある日、この垢抜けた婦人が、杉田と立ち話をしている時、

「うちに遊びにいらっしゃい」と言った。

杉田は、その家が歩いて十分ぐらいの所で、高校へ行ってる、ひとり娘と二人暮らしだということを聞いていたので、相手方の都合のいい日に訪ねた。

かの婦人は「私は糠漬が得意なのよ」と言いながら新鮮なキュウリやナスの漬物を出し、お茶を注いでくれる。そして、娘自慢をするのだった。杉田は丸田辰夫から店の前を通るセーラー服の彼女を教えてもらっていた。背の高い美人だった。

杉田は密かに付きあってみたいと思った。が、しかし、その後十日も経たないうちに、すらりとした好男子と和(にこ)やかに歩いているのを見てしまった。とても太刀打ちできそうにないと、あきらめたものだ。

そうこうしているうちに、福田ふみよからも「覆水盆に返らず」などと、やや的外れな例を引いた、恋の離別状を杉田良一は受取ったのだ。夜、蒲団の中で、はじめて杉田は涙を流した。そしてそれは声を立てることもできずに、いつまでも続くのだった。悔し涙というより、自らの哀れさだった。

※

八百屋での勉強は、さすがに困難だった。狭い上に、店先の客との応対をもろに浴びるのである。まさに精神が集中できない。杉田はできるだけ学校で本を開き、筆記し、夕方帰るようにした。

別に、困ったことは、食費と下宿代だった。米は実家から持ってきたが、時に米兵立ち合いのもとでの一斉臨検に遭って、リュックの中の米を全部出させられた。汽車が、ある駅に到着すると、急に混んでいる車内に彼等は乗ってくる。そして没収するのだ。これも食糧管理法が

あったからである。こんな時、杉田は丸田宋太郎に事情を話し、勘弁してもらうのだった。しかし下宿代は全く払わなかった。

下宿代、副食費を含め、現金は全く出さなかったのである。実家は地主と言われていたが、現金がないことを杉田は知りすぎるほど知っていた。だからといっていいというものではない。

「出世払いにして下さい」とも言えない。悶悶と悩みながら、時は過ぎてゆく。

できるだけ杉田は丸田の家にいる時間を少なくするよう工夫はした。しかし夏期休暇前の前期の試験の時は、どうしても夜まで勉強しなければ単位が取れそうにない。一夜漬の試験勉強になってしまう。

普段、映画を見たり、実家から米を持ってきて、売って小遣稼ぎをしたりで、いつの間にか時間は過ぎてしまうのだ。一夜漬勉強は中学生時代も同じだった。考えてみれば怠惰なことだ。

杉田は夏期休暇が終わって、また丸田宋太郎の八百屋に居候をきめこむ。

「居候因果と子供嫌ひなり」と柳多留の誹風そのものになってゆくとは、杉田の思慮に欠けるところであり、人の道をはずしたところである。「義理と褌欠かされぬ」と言うではないか。

「そんなことは、分かっているわい」と杉田は言っている。それができないから、遠慮し、小さくなっているのだと言う。

分かっていたら、手を打てと誰かが言う。

そんな中でも宋太郎は、

「おい、風呂に行こう」

と言って、杉田を誘ってくれるのだ。

優しさなのか、ついでなのか、計りかねながらも、杉田は宋太郎の後についてゆく。

八百屋は、現金仕入れで、当然品物は現金で売る。さつま芋などは、すぐ売り切れる。他の野菜、果物類の売れ行きもよい。かりに売れ残りそうだとみれば、一山として値を付ける。

インフレーション、新円切換、（物価の高騰）この八百屋でも、売り上げの紙幣が山となる。一部は保留し、この札束を持って、早朝から果物や野菜類を仕入れてくる寸法である。

「おにいさんは、いつ帰るの？」

次女の小学一年生が杉田に言う。

「うん、近いうちに帰りたいと思っているよ」

「ふうーん」

少し雲行きがあやしい、と杉田は感じた。

九月になると、

「おにいさん、もう自分のうちに帰ったほうがいいよ」
次女の高子は、あまり表情に出すこともなく、杉田の顔も見ないで言いだした。
杉田は、そろそろ下宿探しをしなければと考えだした。
ある日、高子が怒った顔で言った。
「おい良一！　お前はもう出て行け！」
「ああ、近いうちに出てゆくよ」
と杉田は言ったものの、まだ何も手配していない。
翌日、友人の山本耕作に声をかけてみた。偶然か奇縁か、空いている部屋があると言う。
山田は「実は僕の借りている下宿」だという。
彼の父親が脳梗塞で倒れたため岐阜の実家へ帰ることになってしまったのだそうである。
「大変汚い所だけれど、一度部屋を見て、大家の条件なども聞いて定めたらいいと思うよ」
その下宿の場所は学校まで五分位のところにあった。学校の帰りに、すぐ下宿に寄ってみた。
「裏口に回って下さい。この二階です」
と下宿の垢抜けた四十歳前ぐらいと思われる婦人が案内した。
すでに階段は黒光りの状態だったが、柱などは古いわけではなかった。
二階の扉を開けてみて驚いた。畳表が破れ、中の藁が出ている畳が二、三枚あって、他の畳も褐色で、西日がガラス戸ごしに当たっていた。八畳の部屋で、北側が道路でガラス戸が付いている。部屋代が安いし、杉田は、これで上等だと思った。
学生証を見せ、実家の話をし、契約書もなしで、いつでも入居してよいと言う。
八百屋に帰ると、高子は、
「なんだよ良一！　出てゆけって言ってるんだよ」と、きたものだ。
毎日のように「出てゆけ」と言われてみると高子だけが言っているのではなく、大人が言わせているんだと、鈍感な杉田も気が付いた。途端に杉田は腹が立った。ただ、腹が立っても自分にそれなりの、不行届きがあり、ただめしを食う食客では、返す言葉はない。次の日、杉田は近所の家からリヤカーを借り、蒲団と数冊の本を積み込んで八百屋を後にした。同い年の辰夫が居たので、
「長いこと、お世話になりました」
杉田は、それだけ言って八百屋に別れを告げた。もちろん、内心忸怩（じくじ）たるものはあった。しかし、その後一度も此の八百屋には行ったことがない。

（三）

五月だった。夕方五時を過ぎたので杉田は慌ててテレビのリモコンを押しチャンネル一を選び、ニュースを聞こうとした。

と、その時電話が音を立てた。

「もしもし、杉田さん？　辰夫だよ、俺」

「え？」

一瞬、杉田は相手が誰か見当がつかない。

「俺だよ、丸田辰夫！」

「何だ、辰夫さんか、今どこにいるの？」

「郵便局の前にいるけど、良一さんの家は、すぐ分かると思ったけど、駄目だ」

「しかし暫くぶりだね。とにかく、そこで待っていてね。すぐ行くから！」

杉田は、すぐ郵便局へ向かった。五分もかからない。探したが見当たらない。局の前を通り過ぎ、引き返すと、

「何だ、元気なんだ。病気にでもなってしまったと思ったよ」

丸田辰夫が、明るい笑顔で言う。やはり以前書いた手紙の「最後になる」という文面に影響を受けたようだ。

「ああ、元気だよ」

杉田が答える。と、そばに女性がいるのに気が付いた。

「あ！　奥様ですか？」

「はい」と「そう」

という返事が、同時に出た。

「そうですか、はじめまして、杉田良一と申します。昔、辰夫さんの所で、大変お世話になりました」

辺りが暗くなってきた。

「立ち話も落ちつかないから、隣の喫茶店に寄りましょう」

杉田は先に立って店に入った。

「あれ！　食事はできないんですか」

「ええ、いまは夜の食事を止めています」

喫茶店の女将は言う。以前はフランス風のコース料理をやっていた筈だが、最近はケーキを主とし、ランチのみにしているという。

近くにスーパーがあって、軽食などできるようになっているから、営業が難しいのかもしれない。

辰夫も車を運転してきたという。ビールとゆきたいところだったが止むを得ない。ジュースを三人分注文した。

「ところで、車を走らせて小金井から此所までくるのは大変だったでしょう」

「いや、八王子からヤビツを抜けてくれば、すぐだよ」

辰夫は、簡単そうに言う。

「良一さんは、大病を患ったと聞いたけど、見た所は何でもなさそうだね」

「ええ、癌だったけど、切除して、もう十六年も経ったから、もう大丈夫、酒は飲めるしタバコは止めて三十年になったよ。それより、おじさんには随分迷惑をかけたり世話になったねえ。この間、墓参りに行ったけど、さすがに、あの辺も様変りした」

「あのー、おじさんは、どんな人でした?」

辰夫の妻が、急に質問してきた。

良一は咄嗟に、

「神様みたいな人でした」

と答えた。辰夫の妻は、嫁として丸田宋太郎と、うまくやっていたのだろうか。

「うん、そんなような所もあったかなあ」

辰夫は、思い出すかのように顔を上に向けた。

「私は、おじさんに特別面倒をみてもらったのに、何ひとつ恩返しができませんでした。今はもう、おそいのですが、出来る範囲で、お礼をさせてもらうつもりでいます」

「ああ、小切手をどうしようと思っている」

辰夫は、まだ小切手を処置していないようだ。兄妹で分けるのも一法であるが、良一は敢えて意見を言うのをやめた。

「ところで、辰夫さんは子供を持っているのでしょうね。奥さんとドライブしているなど羨ましいよ」

「うん、いたけど、このヤビツ峠で亡くなってしまったよ」

「え!　病気ですか、事故ですか」

「いや、自分で……」

「あのー……そう」

杉田良一は返事に窮した。今日が命日かもしれないと良一は直感したが、言葉にはできない。本人は余程苦しみ悩んだことだろう。

「やっぱり、追い詰めるのは良くないよな」

辰夫は誰にともなく言ったが、自分の妻に言っているように、良一は感じた。あるいは、嫁と舅との問題でもあったのか。所詮良一には関知すべきところではない。

「大分暗くなってきた。夜道は危ないでしょう」

良一が言うと、辰夫は

「なに、夜の方が車は少ないし、かえって安全でもある。ただスピードだけ注意すればね」

良一は夜、車を走らせるのは苦手だが、辰夫は夜の方が楽だという。

「いや、今晩は長く引き留めてしまって悪かった。奥様は元気そうですから、夫婦仲良く生きてゆきましょう」

「はい、私は少し悩みました。良一さんと、お会いできて、よかったと思いました」

「私は手術後障害者になりましたが、障害者仲間と話すことによって、却って気分が若がえり元気になりました。人との付き合いは大事にしましょう」まあ人生、家族って難しいもんだ。

「夜道を甘く見ないで、気をつけて帰ってよ」

杉田良一は、重荷をひとつ下ろした気分だった。